様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ０２７２７

研究課題名（和文）資質・能力の連続的発展と道徳的実践性を担保する生活科・社会科の学習指導モデル開発

研究課題名（英文）Development of a model for instruction in life and social studies that ensures continuous development of qualities and abilities and moral practicality

研究代表者
溜池　善裕（tameike, yoshihiro）

宇都宮大学・共同教育学部・教授

研究者番号：６０２６０４５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：道徳的実践性が担保された資質・能力を，生活科や社会科の学習に生かすには以下が必要である。(1)子どもたちに足りない資質・能力を指導する場を設定する。①何が足りないかを明確にする。②指導とは子どもたちの学習の仕方（個々・共同）に関する指導をいう。③その指導は，以下の(2)のように行う。(2)子どもたちが相互に助け合い協力し合う場を教師がつくりだす。①子どもたちが互いを必要とすると意識できるような場にする。②(1)の①②を意識しながら何を指導する場になるのかを見きわめる。(3)上記(1)・(2)において培われた資質・能力が，生活科や社会科で発揮されるよう，単元の位置づけを明確にして実施する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
小学校低学年，とくに１年生における学習指導は，さらに上の学年の子どもの学習や，教師による学習指導を支えるきわめて重要なものである。上の学年および小学校１年生で「道徳」を実施しても，子どもの問題行動や，人間関係のトラブルが消えないことは，学校現場においてよく知られているが，これは低学年の各教科において，本研究が定義したような意味での学習指導が行われていないために起こるものである。本研究は上記の問題を解決すると同時に①教科担任制への移行，②「教師の発問と子どもの答えによって進む」という授業に関する固定観念から抜け出す研修方法，③タブレット端末等の学習における位置づけの見直しに寄与すると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The following are necessary to utilize the qualities and abilities with guaranteed moral practicality in learning life and social studies.(1)Set up a place to teach children the qualities and abilities they lack. (1) Clarify what is missing. (2) Guidance refers to instruction on how children learn (individually and collectively). (3) The instruction shall be given as follows (2).(2)Teachers create opportunities for children to help and cooperate with each other. (1) Make it a place where children are aware that they need each other. (2) Find out what it will be like to teach while being aware of (1) and (2) of (1).(3)To ensure that the qualities and abilities cultivated in (1) and (2) above are demonstrated in life and social studies, the unit should be clearly positioned and implemented.

研究分野：社会科教育

キーワード：道徳的実践性　社会科　生活科　道徳　教科担任制　低学年　学習指導　１年生

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1)低学年における生活科と中学年以降の社会科の接続については，十分な研究がなかった。

(2)低学年および中学年の子どもの知識・理解を問題とすることと，個々の子どもの問題行動や，子ども相互の関わり合いにおけるトラブルについては，対症療法的な対応が行われているのが実際であった。

(3)とくに，上記(2)については，教科の道徳を実施し，読み物教材を用いた話し合いを通して授業を実施したとしても，道徳的にしてはいけないことは分かっていても実際の場面ではできないことが現場では広く知られている。教科・道徳については，指導が形式化し指導内容も観念的なことがらの理解にとどまり，実効性がない。

2. 研究の目的

(1)上記を背景としながら，子どもたちに道徳的実践性が養われつつ，生活科および社会科の資質・能力が育つ学習モデルを構築することとした。道徳的実践性とは，ただ友だちに優しくしたり，友だちを大切にしたりすることを，教条主義的に行うのではなく，学習のために友だちと助け合ったり協力をするなかで，学習のためには友だちが必要であることや，友だちを大切にすることによって，仲間との学習がより充実したものとなったり，深まったりすることを，実感をもって知る中で，日々の生活の中でもそして学習においても，友だちと向き合って生活していくということである。

(2)つまり，学校での生活全体において，友だちをどのように大切にし，そのことによってどのように学級全体をよくし，そのことによって自分も高まって行くかを考えまた行い，それをさらにフィードバックして考え続け行い続ける，良くする方向に向かって動き続ける（道徳的実践性）ことが，道徳的実践性なのである。このような道徳的実践性の上に，知識・理解等をはじめとする資質・能力が乗るのであり，そのための方法を明らかにすることで，学習モデルを構築するのである。

3. 研究の方法

低学年および中学年の子どもが生活科や社会科でどのような学習をするのかについて，その集団性と個々の学習の状況を知るために，定期的に観察し，その際に授業を参観して授業記録を作るとともに，個々の子どもの日記等の作文をデータ化し，子どもたちがどのように道徳的実践性を獲得する中で，資質・能力を伸ばして行くのかを分析・考察した。

4. 研究成果

(1)従来の発問する･答えるという学習モデルの，次のような重大な問題点が明らかになった。

①一般の授業，すなわち教師が発問してその場で子どもたちが答えるような授業モデルでは，発問における問が，教師のものであるため，子どもたちにおいて本当に知りたいことや考えたいことが，問いとなって発せられない。これは学習の意欲にかかわる重要な問題点である。

②そのため，学習が子どものものとはならず，問に迫ろうとしたり，問と関係する疑問を発見し，それについて調べたり，考えたり，その疑問を解決したりしようという，積極的な意欲が

授業では発現しない。①と関わる重大な問題である。

③またそのような状況下においては，子どもたちは真剣に学習をしようとしないことも明らかになった。子どもたち一人ひとりが真剣に学習しようとはしないという大きな問題である。

④真剣に学習をしないとは，一人学習において自分自身で疑問を発見しそれについて調べたり考えたり，またそのことを通して新たな疑問を発見したりという，学習が成立しないことを意味する。このことは，子どもたちが持てる資質・能力を使うだけで，それ以上の資質・能力を獲得しようという方向に向かわないという問題であり，資質・能力が育たないという根本的な問題につながる。

⑤また，上記④は共同学習においては，子どもたちが助け合い協力して，みんなの学習の問を発見しようとしたり，問に迫るために同様の助け合いや協力をしたりする必要がないため，子どもたちが自分たちの学習を作ろうとはしないことも明らかになった。

⑥上記⑤において，子どもたちが助け合い協力し合うところに，道徳的実践性が生まれるが，それを発揮するような授業になっていない場合は，当該の実践性に関わる指導が出来ないことを意味する。

(2)上記問題を解決するために次のような学習モデルが必要であることが明らかになった

個々の子どもの学習を「一人学習」とし，子どもたちが助け合い協力して作る学習を「共同学習」とした上で，道徳的実践性を養いつつ資質・能力を伸ばすような学習モデルを作り，それを実施し検証して行くことが適切である。

一人学習　：　個々の子どもによる自律的学習

共同学習　：　個々の子どもが自律的に学習したことがらを持ち寄って作る学習

授業＝共同学習とし，子どもたちが持ち寄った学習をもとに，**みんなで学習を作り，新たな疑問や問題，そしてみんなで解決すべき問を発見する場として再定義**する。すなわち，現状のように，クラス全体で全く同一のめあてを教師が与え，そのめあてを達成するために教師が準備した学習を，その方向性にしたがって（教師の意図通りに），発問と答えによって授業を進めて行くような授業を授業モデルとはしない。

(3)上記のような学習モデルにおいて以下のような指導方法を取る

学習指導：一人学習における学習の仕方の指導，および共同学習における**学習の作り方の指導（＝学習指導）**を行う。

指導方法：一人学習については，日々の日記を家庭での学習として位置づけ，コメントや個別指導を通して，子どもが自分で発見した疑問を解決したり，解決するために調べたり考えたり実験したり出来るようになることを目指して働きかける。共同学習については，仲間と協力してよりよい学習を作るために，どのように友だちの話を聞いたり，それにどのように質問したり，それを生かして自分の考えにつなげたりすれば良いかを，問題点が表出した時にタイミングよく指導する。※各教科においては一人学習を通して，生活科や社会科にかかる資質・能力が形成されるが，それが持ち寄られる共同学習においてその問題点等が明らかになり，それが指導されることでその資質・能力が確かなものとなる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 溜池善裕，渡辺知世	４．巻 10
２．論文標題 「思考の足場」を持ち助け合い協力して学習を作る子どもを育てる―小学校３年・社会「くらしを守る」を手がかりに	５．発行年 2023年
３．雑誌名 宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要	６．最初と最後の頁 155-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 溜池善裕	４．巻 413
２．論文標題 学習-生活のために自ら生活をすることによって自己の生活の発展を図る-する子どもを育てる学習法：木下竹次・武田一郎主事が手渡したバトンを「しごと」として教員に託した重松鷹泰達の意図とは何か	５．発行年 2022年
３．雑誌名 考える子ども	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 溜池善裕	４．巻 141
２．論文標題 奈良女子大学附属小の学習指導がどのようにそれを「しごと」にし子ども達を成長させていくか：板書・日記・授業記録を５年間追って分かったこと	５．発行年 2020年
３．雑誌名 社会科教育研究	６．最初と最後の頁 pp.31-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 溜池善裕	４．巻 7
２．論文標題 「朝の会」における学習指導法：奈良女子大学附属小2年月組の「朝の会」の1年	５．発行年 2020年
３．雑誌名 宇都宮大学教育学部教育実践紀要	６．最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大嶋正克，溜池善裕	4．巻 7
2．論文標題 中学校社会科における学習指導について②：教科担任制における授業での関わりを通して	5．発行年 2020年
3．雑誌名 宇都宮大学教育学部教育実践紀要	6．最初と最後の頁 53-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤崇晴,溜池善裕	4．巻 7
2．論文標題 「主体的・対話的で深い学び」を目指した学習指導について:「わたしたちのくらしと日本国憲法」の実践から	5．発行年 2020年
3．雑誌名 宇都宮大学教育学部教育実践紀要	6．最初と最後の頁 463-466
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

1．著者名 唐木清志，溜池善裕ほか	4．発行年 2023年
2．出版社 東洋館出版社	5．総ページ数 168
3．書名 社会科の「問題解決的な学習」とは何か	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関